

## 2026 年度大学院博士前期課程試験問題(第 2 回)

2025 年 11 月 22 日実施 [環境計画分野(配点 50 点)]

以下 1、2、3 の問いに答えなさい。

(解答用紙は、それぞれの設問に対して、必ず 1 枚ずつ使用すること。裏面まで使ってもよい)

1. 下記の 3 つのタームについてそれぞれ 100 字程度で簡単に説明しなさい。

(配点 15 点)

1) ビオトープ

景観生態学的には生態系ネットワークを構成する基本単位であり、生物が生息・移動・繁殖するための重要な空間。都市や農村の中に点在するビオトープが互いに連結することで、生物多様性が維持される。また、人と自然の関係を再生し、環境教育や地域の風景形成にも寄与する場となる。

2) 里山

里山とは、人々の暮らしと自然が長い時間をかけて共に形成してきた森林や農地などの地域環境を指す。景観生態学的には、人の管理によって多様な生態系が維持される「半自然的景観」であり、生物多様性の宝庫として重要な役割を果たす。

3) 生物多様性

生物多様性とは、地球上の生きものの多様性を示す概念で、①種の多様性、②遺伝的多様性、③生態系の多様性の 3 つから成る。これらが相互に関わり合い、地域の環境の安定性や回復力、そして人と自然の共生を支える基盤となる。

2. 「都市におけるグリーンインフラ導入の意義」について 300 字程度で簡潔に論述しなさい。

都市におけるグリーンインフラ導入の意義は、多面的かつ持続可能な都市づくりにある。まず、生態系や緑地、水辺などの自然要素を都市の基盤として取り入れることで、生物多様性を保全し、生態系ネットワークを再生できる。また、雨水浸透や貯留による洪水の軽減、気温上昇の抑制、空気浄化など、環境調整機能を高める効果が期待される。さらに、公園や緑道、屋上緑化などは、市民の健康や交流、環境教育の場ともなり、暮らしの質を向上させることができる。グリーンインフラは、自然と共生するレジリエントな都市を実現するための重要な基盤となる。

(配点 15 点)

3. 日本の風土に合った自然再生、環境計画・設計のあり方について 500 字程度で論述しなさい。

(配点 20 点)

日本の風土に合った自然再生や環境計画・設計のあり方は、単なる自然の復元ではなく、「人と自然の共生関係を再構築すること」に本質がある。日本は南北に長く、多様な気候・地形・植生を有し、地域ごとに独自の風土が形成されてきた。かつての里山や水辺、農村景観は、人々の生活と自然の循環が調和した「半自然的生態系」として機能していた。したがって、日本の自然再生には、このような風土性や暮らしの知恵を踏まえた計画が求められる。たとえば、地域固有の植物を用いた植栽、雨水を活かした水循環の再生、住民参加による環境管理などがその具体例となる。また、景観生態学の視点からは、生態系ネットワークを面的につなぎ、都市・農村・山地が一体的に機能するような広域的デザインが重要となるだろう。さらに、五感を通じて自然と関わる体験的なデザインや環境教育を通じ、人々が自然の変化を感じ取りながら風景を「ともに育てる」文化を再生することも必要になる。日本の風土に根ざした環境設計とは、地域の生態的特性と文化的記憶を尊重し、人と自然が共に息づく未来をデザインする営みである。